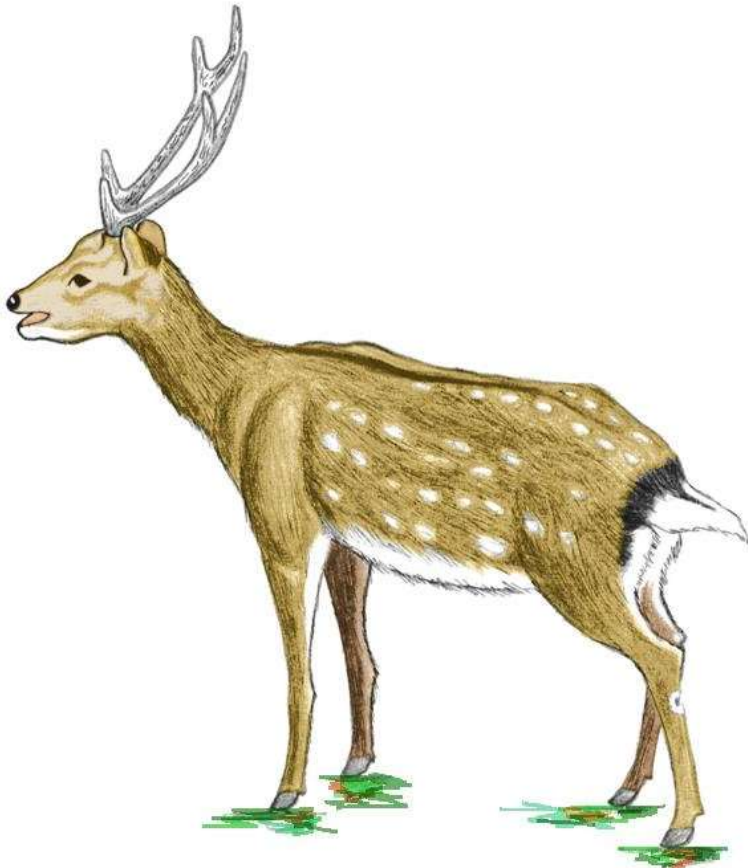


珍しいものを見た気がして、ちょっと得した気分だ。まあ、考えてみれば犬だって、猫だってあくびをするではないか。ひよつとしたら生きとし生けるもの、ミミズだって、オケラだって、アメンボだって、みんなあくびくらいするのもかもしれない。

この鹿はまだ寝たりないのか、いつの間にやらまた落ち葉の上に乗る。寝そべり、コクリコクリとやっている。私はさすがにそろそろ仕事に戻らなくてはならない。



二月十二日 午後 屋久島野外博物館・別館

この別館にくるのは、これで三度目だ。鹿について知りたいことがあるたびに、話を聞きにこのボロい建物を訪れるのだが、人が居たためしがない。案の定、今日も誰もいない。仕方がないので、これまでと同じように沢山ある本棚へ向かった。とりあえず鹿について色々書いていそうな本をパラパラめくってはみたが、あくびのことなど、どこにも書いていない。まあ、鹿のあくびを気にするような物好きはそうはいないのだろう。でも、なんとなく諦めきれずに、広いとはいえない館内を物色し始めた。

三回目にして初めて気づいたのだが、この館に入ってすぐの受付の机の上に質問用紙の束があり、その横に空き箱で作られた「質問受付箱」が置かれていた。どうやら、この質問用紙に聞きたいことを書けば、答えてくれるらしい。ただ、その用紙の上にはうつつらと埃が被っている。受付箱の方もかなり前に作られたらしく、色あせて、ちよつとひしゃげている。箱の中を覗いてみると空っぽで、ただ底に小さなこがねむしの死骸が一匹転がっていた。これでは返事があるのか怪しいが、まあ、ダメもとで書いてみることにした。質問用紙の埃をパタパタと払い、机の上に転がっていたチビた鉛筆をとって、椅子に腰掛けた。

用紙には「聞きたいことをこの用紙に書いて、受付箱に入れてください。」とあり、その下に「学年」「名前」「住所」「電話番号」を書く欄がある。明らかに子供用だ。「学年かあ、困った。なんて書こう」。しばらく座ったまま固まっていたが、「もういい、俺は小学生ということにしてしまおう」と、やけくそ気味に叫んで、大人とバレないように左手で書き始めた。学年は三年生ということに

した。

さて、質問の方がシンプルなのがいいだろう。この前、鹿のあくびらしきものを目撃したわけだが、鹿って一日何回あくびをするのだろうか。自分が一日何回あくびをしているか知っている人はまずいらないだろう。まして動物について、そんなこと解る筈もなさそうだが、聞くだけ聞いてみよう。「やくしかは一日なん回あくびをしますか。」と、左手でヨロヨロと書き入れた。質問用紙にはまだまだ余白がある。ついでに色々聞いてやろう。あくびの回数を聞くなら、おならの回数も聞くのが筋というものだ。どうせ小学生がやっていること、何を聞いても平気である。おしっこどうんこのことも聞かねばなるまい。そうそう、あの耳をほじるのも知りたい。耳をほじるなら、鼻もほじるかも知れない。これも聞くべきだ。

こうして、「一日なんかい」という質問が六つ並んだ。

「今日はこのくらいで勘弁してやる。」とかなんとか訳の解らないセリフをぶつくさ言いながら、私はその用紙を半分折り、質問受付箱につっこんだ。はてさて、どうなることやら。



三月十七日 夜 家中

夕飯後のお茶をすすりながら、この数日間に届けられた郵便物に目を通していた。来るのは大概、請求書と何かのセールスのダイレクトメールである。何が悲しくて東京の高層マンションを買いというのだろうか。それらの中に一通だけ手書きの封書があった。送り主には心当たりがない。いぶかしく思いながら封を開けた。

「拝啓、向春の候、ご健勝のことと存じます。先般、屋久島野外博物館・分館より、貴兄の質問に回答するよう、依頼を受けた次第。当方が承知している範囲で、ご回答申し上げます。」とある。どうやら、例の質問の返事のようなものである。一月以上も前のことで、すっかり忘れていた。あの時は質問をしたものの、どうやって答えてもらえるのか解らなかった。次にあそこを訪ねたときに答えてもらえるかとも思ったが、それでは私がいい歳したおっさんであることがバレてしまう。しかも、とてつもなくへタクソな字で、しょうもない質問を連発してしまったので、かなり恥ずかしい。まあ、そんな時は「いやー、うちの息子が書いたようでハッハッハッ・・・。」などと、居もしない子供をでっちあげる腹だった。が、手紙でくるとは。まあ、住所を書いたのだから当たり前かもしれない。こちらとしては、この方が正体がバレなくて好都合だ。手紙の送り主をもう一度見てみると「永田栗生」とある。そうそう、最初は誰だかピンと来なかったが、この人は例の博物館で私が読んでいた「ヤクシカ」の全て「の一部」という本の著者だった。

拝啓 向春の候、ご健勝のことと存じます。

先般、屋久島野外博物館・分館より、貴兄の質問に回答するよう、依頼を受けた次第。当方が承知している範囲で、ご回答申し上げます。ただし、ヤクシカの生態や行動については未だ不明なる点が多々あることを先にお断りしておく。

貴兄の質問に答えるためには、多くのヤクシカの行動を昼夜を問わず二十四時間、詳細に観察し続けなくてはならない。しかるに、野生状態のシカを夜間も含めて連続観察することは非常に困難を伴う。従って、お教えできることは、当方が日中に数頭のヤクシカを観察して得られた情報のみである。それを元に二十四時間当たりに換算して、各行動の一日当たりの生起頻度を算出した。

一、一日のあくび回数について

春夏秋冬それぞれの季節に、成熟したヤクシカのオス・メス数頭を間近で観察し、彼らの行動を合計六八四時間十二分記録した。この調査手法は個体追跡法と呼ばれるものである。この観察時間中のあくびの回数は合計七五回。これを一日（二十四時間）当たり換算すると二・六回あくびが生起された勘定になる。当方の印象ではシカが長時間の休憩中あるいはその後であくびが生起することが多い。あくびは立ってする場合と、横臥してする場合があるが、シカはどちらでも前方をしっかりと向き、それに専念している。

二、おならについて

個体追跡による行動観察のみならず、断片的な観察も含めて、当方これまでシカの放屁を確認したことがない。ただし、いわゆる「すかしっぺ」を把握することは困難であり、全く放屁しないかど

うかは不明である。なお、排糞と共に消化管内の気体成分が肛門から放出していると推測されるが、これを放屁といふべきかについては処々異論があるであろう。なお、同じ反芻動物であるウシはプーと「おなら」をするそうである。

三、一日のおしっこ回数について

行動観察中に排尿は全部で八七回あり、一日当たり三・一回となる。ただし、観察中に多少の見逃しもあったと思われる、この値より少し多いかもしれない。なお、一回当たりの排尿時間は平均約十七秒であるが、長いものではオスが五六秒かけていたこともあった。排尿はオス・メス共に四肢で立ったまま、ほんの少し腰を落とし、じっと前を向いて行う。

四、一日のうんこ回数について

行動観察中に排糞は四二六回あり、一日当たり十五回となる。ただし、多少の見逃しがあると思われる、この値より少し多いと思われる。排糞は食べ物を探索時に歩きながら行うことも多々あるが、比較的、休憩後に歩き始める際に行うことが多いようだ。排糞の前兆としては、まず尾が持ち上げられ、次に肛門が緩められる。しかる後に、長さ一センチ弱の俵状のフンを多数、一気に落とす。一回の排糞数は概ね十〜五十粒程度と見積もっている。

五、耳掃除について

耳掃除は一連の毛づくろいの最中に見られる。後足の蹄の先を耳の穴に入れ、搔き出すよう動かす。また、他のシカの耳掃除をしてやることもある。他のシカの耳を掃除する時は、口を相手の耳の

穴に強く押し込み、前歯を使って噛むようにして行う。されている方は、耳に口が押し込まれるたびに頭を揺り動かされるが、嫌がる様子もなく、終わるまでずっと動かずにいる。耳掃除は珍しいものではなく、しばしば観察できる。しかし、当方正確な回数を記録しておらず、頻度を算出できなかった。真に残念である。

六、鼻掃除回数について

シカが鼻の穴をほじる行動は、行動観察中および断片的な観察を含め、一度も観察していない。舌を伸ばして鼻を舐めることはあったが、鼻の穴の中まで入れるには至らなかった。

以上が、貴兄の質問に対する回答である。不十分な点多々あるがご容赦願いたい。貴兄が今後とも野生動物に対して深い興味、関心を持ち続けて頂ければ幸いである。

敬具

三月十七日 永田栗生

同日 深夜 布団の中

シカは一日三回くらい、あくびをするらしい。今度、自分が一日何回あくびをするのか数えてみなくては。ただ、あくびって、気を抜いている時に出てくるわけで、そんな時にちゃんと記録できるか自信がない。でも、鹿より断然多い気がする。

はつきり言って面白半分で質問したのだが、あまりにまじめに答えてもらうと、ちよつと気恥ずかしい。自分が「貴兄」などと呼ばれることなど一生のうちに何回あるだろう。それもそうだが、年寄りだからか、学者だからか、あの文面はかなり堅苦しかったな。というか絶対、小学生向けの文章じゃない。ひよつとして、私が大人なのがバレてたのか！少し冷や汗が出てきた。